

脳ブームの迷信、真実、教訓

大阪大学 大学院生命機能研究科および脳情報通信融合研究センター
藤田一郎

この一、二年は落ち着いてきつつありますが、一九九〇年代後半より、日本では「脳ブーム」とも呼ぶべき現象が続いています。この社会現象は、脳研究をしている私にとっては本来、歓迎すべきものであるはずなのですが、実態は大きな懸念を感じずにはいられないものでした。そこで、私は、ブームがピークであった二〇〇六年から数年、その懸念を社会に伝える活動をしてきました。今回、お求めがありましたので、「ニセ科学とはどういうものか」、「社会にあふれる情報に私達はどのように接するべきか」、「科学者や企業人にどのようなモラルが求められるか」という問題を考えるきっかけとして、脳ブームとその真実について、お話ししたいと思います。

脳科学とその関連分野の近年の大きな発展は、社会の様々な期待に応える成果を出しつづけています。さらに、ごく近い未来に、これまで以上の大きなインパクトを社会に与えることは確実です（例：精神疾患や発達障害の原因究明、ケア・治療法の開発、ブレインマシンインターフェイス、ロボット工学や通信技術への応用など）。このような医療や工学技術に対する期待に加えて、脳のもつ様々な不思議な性質の紹介、脳の「健康」にとって良い生活習慣の指南、脳の特性を活かした仕事術の紹介など、脳に関する話題は多くの人々にとって興味を強くひくものであり、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌、インターネットを介して情報があふれ出、また、脳を鍛えるドリル・ゲーム・本、脳に効くと言うサプリメントなどが相次いで販売されました。マスメディアにとってみれば、脳の話は、一定程度の売れ行きを保証する格好のトピックスです。

しかし、残念なことに、このように世間にあふれ出た情報や商品の中に、不正確な情報や効果が怪しい商品、脳科学から見ると疑わしい言説が大量に出現しました。科学的根拠のない情報が信憑性のあるものとして流布され、名だたる企業が科学的根拠のない商品を、科学的根拠があるように装って大量に販売しています。もっとも懸念すべきことは、これらの不確かであり、不正確である情報が、教育、介護、発達障害児支援の現場をも浸食しつつあることであると思います。

本講演では、脳ブームの中で流布されている「迷信」の具体的事例をとりあげて、その検討を行います。流布されている主張に対してどんな根拠があるのかを求め、根拠がなければすくなくとも無条件では信じないという態度が必要であることを示します。

私たち専門家は、必要があれば、正当な疑いを公に表明することによって、無防備に信じて受け入れる人々の被害を避けるための責任を果たすべきと考えます。ことは、脳ブームだけに限りません。福島第一原子力発電所での事故という明らかな人災の背景には、なされるべき健全で建設的な批判がなされてこなかった40年の時間があると考えます。不確かなこと、正しくないことが社会的常識として放置されないようにすることが、どの分野においても大事であると思います。